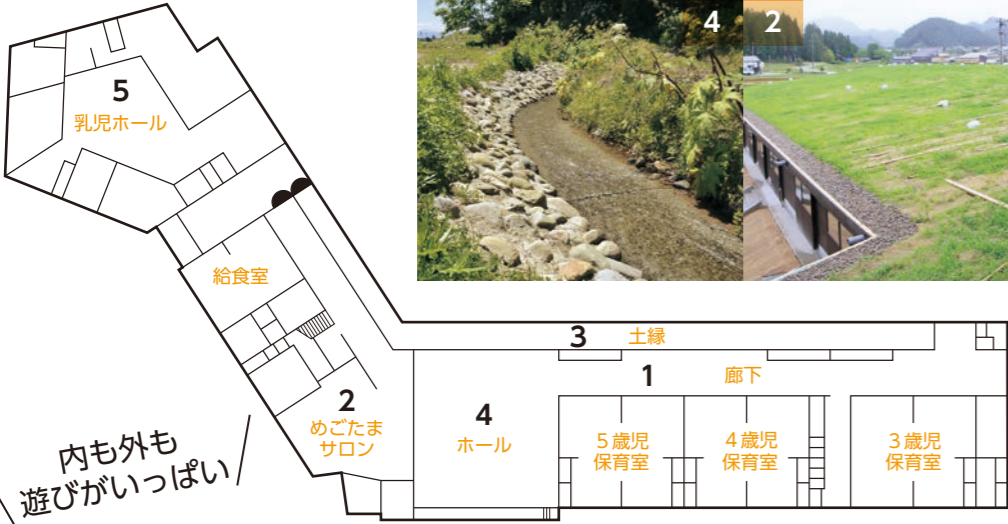


▼1_園の田んぼが目の前に。稲の成長を間近で観察できる。2_屋根の一部には草を植え付け。いずれは羊やポニーを放す予定。3_園庭にはミニ水路や柱など、わくわくする素材がいっぱい。4_園の周りの流れる水路もきれいに整備。



乳児棟は五角形を3つの保育室に分けており、どちらを向いても新鮮で、楽しい空間が広がる。全体を5本の柱が支えており、その中心は小さなホール。子どもたちの舞台としても活用していく。



4

園舎には金山杉をふんだんに使用。直径1mを超す金山杉をそのまま使った柱は圧倒的な存在感を放つ。ホールの梁なども含めて、新園舎建設にあたって樹齢200年の杉が7本伐り出された。



園舎と外をつなぐ土縁。園舎の庭側をめぐる構造となっており、乳児の保育室からも、幼児の保育室からも園庭に出ることが可能。「内でも外でもない」。そんな空間が子どもたちの遊び心をくすぐる。



2

園舎のど真ん中、正面玄関を入ってすぐのスペースに台所のある土間が設けられた。その名も「めぐたまサロン」。地域の方々が自由に集まり、子どもたちと交流する。そんな姿が目に見えが。



保育室と土縁の間の廊下。ホールから一番奥の幼児土間まで抜けているとても広いスペースだ。単なる通り道ではなく、備え付けの遊具で遊んだり、外へ出る準備をしたりと、使い方は自分次第。

特集 めぐたまのおうち

町唯一の保育施設である認定こども園めぐたま。この7月、乳児部と幼児部で別々だった園舎がひとつになり、新園舎が誕生しました。就学前の多くの子どもたちが日中の大半を過ごす園舎。子どもたちの「おうち」とも言える新園舎と、めぐたまの教育をひもときます。

めぐたま新園舎の誕生

「わぁーっしょに登ってもいいの?」「この柱すごく大きい!」「廊下で追いかけてこしよう!」

7月3日、子どもたちの興奮に包まれながら、認定こども園めぐたまの新園舎が開園され、新たな生活がスタートしました。

平成23年4月、町立の保育園と私立の幼稚園が、人口減少にもない統合されてできた認定こども園めぐたま。運営はひとつになりましたが、乳児部(0~2歳)と幼児部(3~5歳)が別々の園舎となったままでした。その後約4年をかけ、子どもたちや保護者の皆さんの意見を取り入れながら、金山の土地に合った園舎づくりが進められました。

外とつながる園舎

新園舎で目を引くのが「土縁^{どえん}」。園舎の庭側に沿って設けられています。土縁とは昔から豪雪地帯に見られる雪対策の仕掛けで、新園舎の骨格となっています。この土縁が園舎と園庭をつなぎ、「外に近い」園舎を実現しています。

絵を描いたり、工作をしたり、はたまた外で畑仕事をしたりする幼児部のみならず、園内外は基地のようなもの。縦横無尽に遊びまわり、さまざまな活動をするために幼児部は比較的シンプルな作りとなっています。保育室と土縁の間の廊下はとても広く、備え付けの家具のような遊具には子どもたちも興味深々。自分たち次第で色々な遊びが広がります。

一方、乳児部はとも変わった形。五角形を3つの保育室に分けているため、色々な空間が存在します。乳児のみならずは保育室で過ごす時間が長くなるため、楽しい空間となるよう、段差を利用したすべり台など様々な工夫がなされています。乳児棟全体は5本の太い柱が屋根を支えており、その中心は小さなホールとして発表会などでも利用していく予定です。

地域がひとつの家族

園舎のど真ん中、正面玄関を入ってすぐのスペースに、台所のある土間があります。その名も「めぐたまサロン」。子どもたちはもちろん、親、おじいちゃん・おばあちゃんなど地域みんなが家族のように集い、過ごす場所。郷土料理を作ったり、木工品を作ったり。「大きな家族」が次世代に知恵をつないでいく、そんな地域の核となるように願いが込められています。